

研究内容	当施設で、介護動作が原因と思われる介護・看護、リハビリ職員の腰痛を有する者は過半数以上を占め、腰痛予防対策は急務である。腰痛診療ガイドライン 2019年 (改訂第2版) では、慢性腰痛に対する運動療法は有用であると示している。 そこで本研究の目的に慢性腰痛のある当施設看護・介護職員に対して実践して行う自宅で行えるセルフエクササイズが腰痛軽減対策に有効であるか明らかにすることとした。
要旨	
審議結果	委員会開催 2024-2-3
意見	前回も指摘されていたが、「整形外科医の関与に関して修正されていない」、「介入後悪化した対象者を除外することで、介入効果を過大評価するバイアスを生むことに対する対策について記載されていない」との意見、また「介入を行うものであり、修正された研究実施申請書内容についての妥当性の判断をふくめ、最終判断として委員会を開催するのがよい」、「この研究で、腰痛軽減対策に有効であるか説明を聞きたい」などの意見があり、再度修正を依頼し、委員会を開催して審査することにした。
新規研究計画の再審議	
申請者	西村 駿
研究名	当施設の慢性腰痛を有する看護・介護職員における腰痛の実態と実践する4週間の自宅でのセルフエクササイズの効果の検討 ～4週間の骨盤周囲筋のストレッチ・Bracingを行っての運動の実施～
審議結果	承認 2024-2-4
意見	前回指摘された「整形外科医の関与」、「介入効果を過大評価するバイアスを生むことに対する対策」、「腰痛軽減対策としてのセルフエクササイズの有効性」、「研究内容の妥当性」について、倫理委員会を開催して、修正された研究等実施計画書の説明を直接受け、委員会内で検討して特に問題ないと判断し承認としました。
研究計画変更の審議	
申請者	加藤 康太
研究名	四日市市介護予防等拠点施設 (ステップ四日市) における短期集中予防サービス (サービスC) の成果と利用者の特徴について
研究内容	四日市市から委託を受け、四日市市介護予防等拠点施設 (ステップ四日市) で実施している介護予防事業である短期集中予防サービス(サービスC)の成果と利用者の特徴について、日常的に行っている評価結果を後方視的に調査する。
要旨	
審議結果	承認 2024-3-2
意見	研究計画書の軽微な変更に関する審査であり、迅速審査を行い、特に問題ないと考えられ、承認としました。

新規研究計画の再審議	
申請者	稲垣 裕介
研究名	バスキュラーアクセス管理に超音波診断装置を使用して
研究内容 要旨	血液透析療法を施行している維持透析患者において、バスキュラーアクセス(以下VA)は透析を行うために必要不可欠である。VAを適切に維持管理することは、透析患者に充実した透析ライフと高いQOLを提供するための我々医療従事者に与えられた使命とも言える。超音波検査は非侵襲的であり、機能(血流量)形態(狭窄状態)を同時に評価することが可能でVA管理に欠かせないツールとなっている。当院での超音波診断装置を使用してのVA検査はVAIT歴のある患者への使用が主であった。VAIT歴のない患者が急にVA閉塞を起こすことがあったため、全患者のVAの状態を把握するために年に一度、超音波診断装置でVAの確認をすることとなった。それにより、VAに対する管理が向上したか後ろ向きに解析する。
審議結果	承認 2024-5-2
意見	今回は、何を評価するのか具体的に説明されており、特に問題ないと考えられ、承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	増田 彩花
研究名	当院における新人教育に関わる療法士の意識調査
研究内容 要旨	卒後教育に関して、新人療法士を教育する際の研修ガイドラインは示されているものの、自信を持って教育にあたることができているか、指導する側がどのような点に重きを置いて指導をしており、どのような思いを抱いているかはあまり調べられていない。そのため、当院に在籍する療法士に無記名のアンケートを実施し、教育者が新人療法士を教育する上で重要視する点や理学療法士(以下, PT)と作業療法士(以下, OT)の違いなどを検討する。これにより、新人を教育する立場にある療法士の意識を高め、指導時の不安の軽減につながると考える。
審議結果	継続審査 2024-9
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考えられ, 迅速審査を行った。「アンケートを取ることで得られることの再考が必用」との意見があり継続審査とした。
新規研究計画の再審議	
申請者	増田 彩花
研究名	当院における新人教育に関わる療法士の意識調査
審議結果	承認 2024-9-2

意見	指摘された箇所は修正されており、特に問題ないと考えられ承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	池田 絵美
研究名	透析患者の服薬管理事例 他職種との連携
研究内容 要旨	服薬管理が十分でないと思われる患者に対し、透析看護師だけでなく、患者を取り巻くすべての関係者と連携し服薬アドヒアランスの向上を目指す。検査結果、透析中血圧、家庭血圧、患者へのヒアリングを通し、内服が十分でないと考えられる患者を抽出、患者に合わせた内服管理を提案し、経過を観察した症例報告。
審議結果	承認 2024-10
意見	症例報告であり、倫理委員会での審査に該当しないと考えられたが、学会で発表することであり、迅速審査を行い特に問題ないと考えられ承認とした。
新規研究計画の審議	
申請者	川合 圭成
研究名	認知症診療において予期しない拡散強調画像での高信号病変を認めた例の検討
研究内容 要旨	認知症診療において、MRIが実施されており、そこに拡散強調画像(DWI)が含まれることが一般的になっている。そこで予期しないDWI 高信号を認める例に時折遭遇する。このようなDWI高信号がどのようなときに見られるのか、DWI高信号を呈した例が、その後どのように経過していくのかについて、診療録より後方視的に検討する。
審議結果	承認 2024-11
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考えられ、迅速審査を行いました。診療録に基づいた後ろ向き研究であり、今後の医療発展に繋がる有意義な研究と考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	鶴 永
研究名	大腿骨転子部骨折における受傷直後の中野3D-CT分類と急性期の歩行能力との関連
研究内容 要旨	本研究では、大腿骨転子部骨折患者において、受傷直後のCT画像を用いて、急性期の歩行能力との関係を調査します。
審議結果	承認 2024-12
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考えられ、迅速審査を行いました。

	いました。 既存試料を用いての研究であり、目的が明確であり、問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	柳原 一也
研究名	当院回復期リハビリテーション病棟退院患者の訪問リハビリテーション利用者の傾向
研究内容 要旨	当院リハビリテーション(以下、訪問リハ)と回復期リハビリテーション(以下、回復期リハ)では2023年8月から回復期・連携シート(以下、連携シート)を用いて、回復期退院患者の中からリハスタッフより訪問リハの利用可能性のある患者を選出している。連携シートは、月毎に情報を共有している。回復期リハスタッフがカンファレンス時、退院後に独居や転倒リスクが考えられ、日常生活動作の確認、生活リズム定着等といった幅広い範囲での必要性を考慮し訪問リハ利用可能性のある患者を選出している。そこから訪問リハ利用に至った患者は約20%となっている。そこで、連携から利用までに至った患者と至らなかった患者を比較し、傾向を調査する事とした。また、訪問リハの利用者がどのような背景や環境において利用しやすいのかを把握し、連携しやすい環境づくりを目的とする。
審議結果	承認 2024-13
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査で、既存試料を用いて、集計・統計処理等を行うものであり、迅速審査を行い、特に問題ないと考えられ、「承認」としました。
新規研究計画の審議	
申請者	大畑 直哉
研究名	長下肢装具使用期間が脳卒中片麻痺者の回復期退院時における短下肢装具での歩行自立度と歩行速度に与える影響について
研究内容 要旨	本研究の主たる目的は、長下肢装具の使用期間が脳卒中片麻痺者の回復期退院時における短下肢装具での歩行自立度と歩行速度に与える影響を解明することにある。長下肢装具を使用した歩行練習は、歩行速度向上を目的とするうえで必要不可欠であり、生活範囲の拡大や転倒リスクの軽減に寄与する。しかしながら、長下肢装具の使用は日常生活において実用的とはいえず、いずれは短下肢装具へ移行する必要がある。短下肢装具では立脚期の膝関節コントロールが求められることから、日常生活動作で移動手段を獲得するには短下肢装具での歩行練習も重要となる。そのため、脳卒中片麻痺患者の歩行再建においてどちらを優位に重みづけするかは非常に重要な視点であり、適切な重みづけについて再定義することは今後の重要な課題であるといえる。 本研究で得られる知見は、回復期脳卒中片麻痺者のリハビリテーションにおいて病棟内での歩行獲得のほか退院後の実用的な歩行における長下肢装具使用期間を判断する際のひとつの指標となることが期待される。
審議結果	継続審査 2024-14
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査で、既存試料を用いて、集計・統計処理等を行うものであり、迅速審査を行いましたが、「参考文献が詳細に書かれていない」、「除外項目の整形外科疾患は範囲が広い」、「平均リハビリ率とは」などの意見があり、継続審査としました。

新規研究計画の再審議	
申請者	大畑 直哉
研究名	長下肢装具使用期間が脳卒中片麻痺者の回復期退院時における短下肢装具での歩行自立度と歩行速度に与える影響について
審議結果	継続審査 2024-14-2
意見	長下肢装具の使用期間が歩行にどう影響するかを解明するのであれば、活動評価はPT単位数ではないか、OT・STを含むのはどうか」との意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	大畑 直哉
研究名	長下肢装具使用期間が脳卒中片麻痺者の回復期退院時における短下肢装具での歩行自立度と歩行速度に与える影響について
審議結果	承認 2024-14-3
意見	指摘した箇所は修正されており、問題ないと判断しました。
新規研究計画の審議	
申請者	笥 丈毅
研究名	脳卒中患者に対して備品装具と本人装具を使用した際の身体活動量および筋活動量の違い
研究内容 要旨	当院に入院し、本人装具を作製した初発脳卒中患者を対象とする。備品装具と本人装具を比較し、リハビリ中の身体活動量と筋活動量の差の有無を明らかにすることが目的である。
審議結果	継続審査 2024-15
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考えられ、迅速審査を行いました。以下の意見があり、継続審査としました。 「患者の自己効力感の評価方法と目的が明確になると良いと思う」、「日常診療では実施しない検査が加えられており、事前に説明書・同意書の取得が必要ではないか」、「備品装具に比べ本人装具が優れていることが明確となれば、より効果的な装具療法を提供できるとは本人装具をすべてに取り入れるということなのか」、「評価項目(頭痛の程度、主観的労度、自己効果感)をどの様に評価するのか、また評価項目全体をどの様に処理するのか、また評価項目全体をどの様に処理するのか(有意差を出すために)記載が無い」などの意見がありました。
新規研究計画の再審議	
申請者	笥 丈毅

研究名	脳卒中患者に対して備品装具と本人装具を使用した際の身体活動量および筋活動量の違い
審議結果	承認 2024-15-2
意見	前回指摘された箇所は全て修正されている。 評価項目(検査)は日常診療で行われているものに限られており、前向きの研究と考えられ、同意書が必要では。
新規研究計画の再審議	
申請者	寛 丈毅
研究名	脳卒中患者に対して備品装具と本人装具を使用した際の身体活動量および筋活動量の違い
審議結果	承認 2024-15-3
意見	前回、承認としましたが、「前向きの研究であり同意書が必要では」との意見があり、検討しましたが、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 令和5年改正について」の、8ページ「IC手続き①新たに試料・情報を取得して研究を実施する場合」のフローチャートにおいて、本研究は「要配慮個人情報取得する」が「いいえ」に該当すると判断し、同意書は必要ないと判断し、再度「承認」としました。
新規研究計画の審議	
申請者	吉田 岳志
研究名	大腿骨近位部骨折の骨折タイプの違いが、四頭筋筋力や歩行機能、ADL動作など身体機能に与える影響について
研究内容 要旨	大腿骨頸部骨折は、高齢者にとって最も重篤な外傷のひとつであり、歩行能力低下とADL(Activities of Daily Living: 日常生活動作)の低下を引き起こすことから、深刻な問題として挙げられている。特に、退院後の歩行障害は、1年後の死亡率の予測因子であることから、歩行能力の獲得は極めて重要である。大腿骨近位部骨折は、頸部骨折と転子部骨折の2つのサブタイプに分類され、それぞれの骨折型に応じたりハビリテーションの個別化が求められる。先行研究では、大腿骨頸部骨折の臨床予後は転子部骨折よりもかなり良好であると報告されており、両者の骨折特性には一定の差異が存在すると考えられる。そのため、各サブタイプにおける機能的予後の違いを明確化することは、より適切なリハビリテーションの構築に寄与する可能性があり、今後の重要な課題である。両者の決定的な差異として、中殿筋への直接的な侵襲の有無が関連するといわれており、股関節機能の低下が歩行能力低下の主要因と考えられている。また、転子部骨折に対して施行されるガンマロッキングネール(GammaLocking Nail: GLN)は手術侵襲により外側広筋の損傷を引き起こす可能性があり、膝関節伸展筋力低下が懸念される。このため、膝関節伸展筋力の低下が歩行能力やADLに与える影響を多角的に検証する必要がある。しかしながら、既存の研究の多くは股関節機能に焦点を当てており、膝関節伸展筋力についての報告は限られているのが現状である。 そこで、本研究の目的は膝関節伸展筋力が退院時の歩行能力低下やADLなどに与える影響について検証し、大腿骨頸部骨折と大腿骨転子部のサブタイプ間の特性の差異の明確化することを目的とした。

審議結果	継続審査 2025-1
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査で、既存試料を用いて、集計・統計処理等を行うものであり、迅速審査を行いました。が、「参考文献が記載されていない」、「今回選択した症例は手術方法が統一されているかどうか明確で「ない」などの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	吉田 岳志
研究名	大腿骨近位部骨折の骨折タイプの違いが、四頭筋筋力や歩行機能、ADL動作など身体機能に与える影響について
審議結果	承認 2025-1-2
意見	迅速審査にて、前回指摘された箇所は修正されており特に問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	伊藤 愛弓
研究名	障害児を持つ親の介護負担感に影響を与える因子の検討
研究内容 要旨	障害児に対する療育の考え方では家族中心のケアが推奨されることから家族のもとで過ごす時間は長くなっており、障害児の身体機能や能力のみならず家族への負担も踏まえた支援が必要となる。そのため日常の育児(介護)の中で親がどのような介護負担感を持っているのか検討する必要がある。本研究では日本語版Zarit介護負担尺度(以下J-ZBI)を使用し日常生活の育児の中でどのような介護負担感を持っているのか検討し、介護負担感に影響する因子には疾患による特異性があるのかを明らかにするとともに、特にどのような因子が大きく影響しているか明確にすることで今後発達段階にある障害児を持つ主養育者や障害に特異的な育児負担感などと比較することで、主養育者の介護負担感軽減に向けたリハビリテーションプログラムの構築の検討する。
審議結果	継続審査 2025-2
意見	軽微な侵襲を伴う研究であって介入をおこなわないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果①育児をしている人に対して介護の評価を使用する理由や配慮がもう少しあったほうが良い(例えば研究名の「親の介護負担感ではなく親の養育又は育児負担感としたほうが良いのでは)②参考文献を詳細に③別紙様式第十三号の修正を、などの意見があり「継続審査」としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	伊藤 愛弓
研究名	障害児を持つ親の育児負担感に影響を与える因子の検討
審議結果	継続審査 2025-2-2

意見	以下の様な意見がありましたので、継続審査としました。 ①介護が強調されすぎている・・・「育児(介護)」といったん記載すればその後は「育児」のみのほうが読みやすいのでは ②対象者は主養育者で障害児は対象者にならないのでは、 ③研究期間の変更を、 ④参考文献を詳細に、 ⑤同意書を準備しているのならオプトアウトの手続きは必要ないのでは
----	---

新規研究計画の再審議	
申請者	伊藤 愛弓
研究名	障害児を持つ親の介護負担感に影響を与える因子の検討
審議結果	承認 2025-2-3
意見	指摘された箇所は修正しており、特に問題ないと考えられ、承認としました。なお、別紙様式第十五号は必要ないと考えます。

新規研究計画の審議	
申請者	晁 ひかる
研究名	当院回復期リハビリテーション病棟における認知症及び認知症疑いのある運動器疾患患者の転帰先に関わる影響因子
研究内容	近年,人口の高齢化に伴い身体障害領域の回復期リハビリテーション病棟(以下、回復期リハ病棟)では、認知症を合併した患者が増加している。一般的に、認知症は退院先の選定に影響する重要な因子である。しかし、実際の臨床では認知症があっても自宅へ退院する患者も一定数存在する。 先行研究においては、脳卒中患者を中心に、整形疾患や廃用症候群の患者に対し転帰先に影響する因子に関する文献が多数存在しているが、認知症に焦点を当てた文献が見当たらなかった。そこで回復期リハ病棟における認知症および認知症疑いのある運動器疾患患者の転帰先に関わる因子を明らかにすることを目的とした。本研究を実施することで、認知症および認知症疑いのある運動器疾患患者に対し、自宅退院に向けて必要な支援や問題点の明確化、対象者が住み慣れた地域で自分らしく生活するための一助となると考える。
要旨	
審議結果	承認 2025-3
意見	「侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査」であり、「既存料を用いて集計を行うもの」と考えられたので迅速審査を行い、特に問題ないと考えられ、「承認」としました。

新規研究計画の審議	
申請者	鶴 永
研究名	歩行獲得からみた骨粗鬆症性椎体骨折における受傷後早期の安静臥床期間の再考
研究内容	骨粗鬆症性椎体骨折患者の受傷後早期の至適安静臥床期間を歩行獲得の面からみて再考す

要旨	る。
審議結果	継続審査 2025-4
意見	研究実施計画書において、以下のような意見がありましたので、継続審査としました。 ①患者様→患者に修正 ②発症後→受傷後に修正 ③10m以上とは10mでOKなのか。 ④歩行可能とは見守りも必要ない状態なのか。 ⑤杖歩行もしくは独歩は受傷前レベルにするのか 上記の点につき修正又は意見をつけて再提出してください
新規研究計画の再審議	
申請者	鶴 永
研究名	歩行獲得からみた骨粗鬆症性椎体骨折における受傷後早期の安静臥床期間の再考
審議結果	承認 2025-4-2
意見	迅速審査にて、前回指摘された箇所は修正されており、特に問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	森 佑輔
研究名	12年間の採血データに基づく維持透析患者の生命予後解析
研究内容	本研究では、単施設において2012年から2024年の12年間にわたる採血データを用いて、各種検査値と生命予後との関連性を後ろ向きに検討することを目的とする。本研究より臨床現場における骨・ミネラル管理の見直しに繋がる情報や、透析患者のQOL(生活の質)や生存率の向上に資することが期待される。また近年に改訂が行われる、骨・ミネラル代謝の診療ガイドライン改訂後の当院の治療指針となることが期待できる。
要旨	
審議結果	継続審査 2025-5
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査で、既存試料を用いて、集計・統計処理等を行うものであり、迅速審査を行いました。が、「この研究をする科学的根拠及びこの研究をすることによってどのような有益な情報が得られるか」「研究期間の齟齬」「オプトアウトの方法が不明確である」などの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	森 佑輔
研究名	12年間の採血データに基づく維持透析患者の生命予後解析

審議結果	継続審査 2025-5-2
意見	前回から大幅に修正されているが、説明不足と考えられる箇所がいくつか見受けられ、また試料の廃棄時期に整合性がないため、継続審査としました。